別紙様式２－２

２０１９年度特別支援教育に関する実践研究充実事業
（新学習指導要領に向けた実践研究）
成果報告書（概要）

受託団体名
千葉県教育委員会

１　指定校の一覧

設置者	学校種	課程又は障害種	学校名（ふりがなを付すこと）
千葉県教育委員会	特別支援学校	知的障害	千葉県立夷隅特別支援学校（ちばけんりついすみとくべつしえんがっこう）

２．事業の実績

（１）事業の実施日程

実施時期	実施内容	評価事項
令和元年５月	○第１回キャリア教育研究協議会 ・研究計画の協議 ○研修会 「キャリア発達を支援する教育の充実に向けて −地域協働活動の推進と「本人の願い」への着目−」 講師：植草学園大学発達教育学部　菊地一文准教授	・研究内容の方向性及び妥当性
令和元年６月～	○研究協議会の協議を踏まえた授業実践（各学部の授業研究の実施、授業内容の評価）	・キャリア発達を支援する学習内容
令和元年６月	○授業研究会 小学部「生活単元学習」 中学部「総合的な学習の時間」 高等部「作業学習（農耕班）」	・キャリア発達を支援する学習内容
令和元年７月	○研修会 「進路について」 講師：千葉県立夷隅特別支援学校 就労支援コーディネーター　田村純一教諭	・卒業後の進路についての理解
	○研修会 「生涯にわたり地域とともに生活していくために −地域協働から考える、家庭、地域、学校それぞれの役割−」 講師：社会福祉法人佑啓会ふる里学舎地域生活支援センター 松橋達也センター長　本郷宏治支援主任 千葉県立障害者高等技術専門校　髙瀬浩司主査	・「本人の願い」の理解 ・「家庭」「地域」「学校」の役割についての理解

	○研修会「福祉サービス事業所・企業等見学会」 ・社会福祉法人佑啓会　ふる里学舎 ・社会福祉法人児童愛護会　青松学園 ・特定非営利活動法人上総福祉会　里庵 ・特定非営利活動法人上総福祉会　燈里 ・東伸産業株式会社 ・神保電器株式会社	・卒業後の進路についての理解
令和元年 9 月	○研修会「PATH を通して『本人の願い』について考える」	・「本人の願い」の理解
令和元年 10 月	○研修会「教員のキャリア発達について」 講師：千葉県立夷隅特別支援学校　年光克水校長	・キャリア発達の理解
令和元年 10 月	○第 2 回キャリア教育研究協議会 ・研究中間報告 ・公開研究会について	・公開研究会の内容や進め方の妥当性 ・研究授業の方向性
令和元年 11 月	○公開研究会 小学部「生活単元学習」 中学部「総合的な学習の時間」 高等部「作業学習（陶芸班）」 ○講演会 「地域協働活動の推進によるキャリア発達支援の充実-新学習指導要領の実施に向けて-」 講師：弘前大学大学院教育学研究科　菊地一文教授	・キャリア発達を支援する学習内容 ・地域協働活動によるキャリア発達支援の理解 ・新学習指導要領の理解
令和元年 12 月	○研修・実践報告 第 7 回キャリア発達支援研究会金沢大会	・研究実践への活用
令和 2 年 1 月	○先進校視察 ・令和 2 年 1 月 17 日（千葉県立君津特別支援学校） ・令和 2 年 1 月 31 日（東京学芸大学附属特別支援学校）	・研究成果報告への活用 ・次年度の計画への活用
	○第 3 回キャリア教育研究協議会 ・研究最終報告 ・今後の方向性について	・研究の成果と課題 ・次年度の方向性
	○県主催　研究成果報告会	
令和 2 年 2 月	○先進校視察 ・令和 2 年 2 月 14 日（千葉県立特別支援学校流山高等学園）	・次年度の計画への活用

(2) 研究課題

各教科間の関連性や校内における各学部間のつながり、家庭・地域や産業現場との連携の在り方などについて検討し、小学部段階から連続したキャリア教育を推進するための教育課程の編成や指導方法等について研究する。

(3) 研究の概要

キャリア発達を支援する学校生活づくりに向けて、基盤となる授業の在り方を検討し、教員の専門性の向上を図った。また、地域との協働を中軸にカリキュラム・マネジメントを行うことを通して、卒業後の自立を見据えたキャリア発達を支援する教育課程の編成の在り方について検討した。

(1) 地域との協働を軸として各学部の授業研究を実施し、単元計画を積み重ねることで、学ぶ意義や年間指導計画等を見直し、キャリア発達を支援する教育課程の編成の在り方を探った。

(2) PATH の研修を行い、本人の願いとキャリア教育との関連性について教員間で共通理解を図ることで、支援の充実を図った。

(3) 校内の組織力向上を図り、小中高連続性のある学びにつなげるために、校務分掌と学級とで連携した１グループ１授業（1G1J）を行い、PDCA サイクルをもとに授業の在り方を検討した。

(4) 学びのつながりを明らかにするために、福祉サービス事業所や企業等の見学会を実施した。

(4) 研究の成果

本研究を通しての成果を以下に示す。

(1) 各学部段階における「地域」「協働」の捉え、「目指す姿」等を明確にして地域との協働に取組んだ。その結果、教員側のねらいが明確になり、児童生徒にとって必然性のある学びを設定することができ、キャリア発達を支援することにつながった。授業実践後には 10 分間の授業の振り返りを実施し、１時間毎の授業の評価、単元の評価を積み重ねたことで、キャリア発達を支援する視点から年間計画を見直すことができた。

(2) PATH 演習を通して、多数で意見を出し合い、多面的に児童生徒のことを考えたことで、児童生徒への理解が深まり、行動だけではなく、気持ちの変化に着目できるようになった。また、「本人の願い」から支援方法や指導内容について考えることで、柔軟な発想で話し合うことができ、意見交換が活発となり組織力の向上につながった。

(3) 学習グループと領域教科の分掌担当者（小中高）が協働して授業づくり取組んだことで、他学部の実践内容を知るとともに、学部間のつながりや現段階で身に付けたい力について確認することができ、授業の目標設定を明確にすることができた。また、教科の専門性が加わったことで、授業が向上し、児童生徒の主体的な学びやキャリア発達の姿を支援することができた。

(4) 本校卒業生が在籍する福祉サービス事業所や企業等の見学を通して、高等部だけでなく、小学部、中学部段階から卒業後を見据えた指導・支援の必要性に気付き、実践に生かすことができた。

（５）課題と今後の方策

＜地域協働の発展と充実に向けて＞

今年度は「キャリア発達を支援する地域との協働」の一歩を踏み出すことができた。地域と協働することで、学校だけでは得ることのできない「気付き」や「学び」があり、児童生徒のキャリア発達の姿を支援することができた。しかし、今はまだ学校からの働きかけが多い状況であり、互いが必要とする関係には至っていない。今後は、今ある地域とのつながりを継続、発展させ、「必要とされる学校・児童生徒」を目指し、地域とのつながりをさらに深いものにすることで、人の求めに応え、人と関わることの楽しさを感じながら、自分らしい生き方を実現していこうとする姿を育めるようにしていく。

＜組織的な教育課程の編成に向けて＞

今年度は地域協働を実践した教科・領域を中心に年間指導計画の見直しを行ったが、学部毎であって、学校全体としての見直しには至っていない。教育活動全体を通して、キャリア教育の充実を図るためには、組織的に教育課程を編成し、実施、評価、改善を図るＰＤＣＡサイクルを確立する必要がある。単元計画・年間指導計画レベルのカリキュラムマネジメントを今後も継続し、学校全体で教育課程を編成、評価、改善していくサイクルを確立していく。

別紙様式２－２

２０１９年度特別支援教育に関する実践研究充実事業
（新学習指導要領に向けた実践研究）
成果報告書（概要）

受託団体名
千葉県教育委員会

１　指定校の一覧

設置者	学校種	課程又は障害種	学校名（ふりがなを付すこと）
千葉県	特別支援学校	知的障害・病弱	千葉県立君津特別支援学校（ちばけんりつきみつとくべつしえんがっこう）

２．事業の実績

（１）事業の実施日程

実施時期	実施内容	評価事項
平成 31 年 4 月	○教育課程研究協議会委員（外部委員）の決定 ○校内研究推進委員会にて今年度の研究の方向性を協議	・研究内容の妥当性
令和元年 5 月	○校内全体研究会の開催 ・今年度の研究の方向性、方法、内容、研究計画を提案、全教員に周知 ○第１回「教育課程研究協議会」の開催 ・今年度の研究の概要、年間計画について提案、指導・助言を受ける ○全体研修会の実施 「『主体的・対話的で深い学び』について～知的障害児教育における『深い学び』を考える～」 講師：筑波大学附属大塚特別支援学校 主幹教諭　中村　晋　先生	・研究内容の妥当性 ・研究の進め方 ・各教科等を合わせた指導の授業づくりの視点
令和元年 6 月	○全体研修会の実施 「知的障害のある児童生徒の質の高い学びを考える」 講師：千葉県立槇の実特別支援学校 教頭　佐々木　操　先生	・各教科等を合わせた指導の授業づくりと評価の観点
令和元年 5 月～令和元年 7 月	○各学部授業実践 ・単元記録表、評価表の改善と記録	・各教科等を合わせた指導の授業づくり
令和元年 7 月	○授業研究会・研究協議会 ・小学部「生活単元学習」	・各教科等を合わせた指導の授業づくり

	・重複学級「日常生活の指導」	・授業の評価、内容
令和元年 8 月	○校内研究推進委員会にて授業公開・研究報告会について協議 ○第 2 回「教育課程研究協議会」の開催 ・授業公開、実践研究報告会の内容、計画について提案、指導・助言を受ける	・報告会の内容、進め方
令和元年 9 月	○授業研究会・研究協議会 ・中学部「作業学習」 ・高等部「作業学習」	・各教科等を合わせた指導の授業づくり ・授業の評価、内容
令和元年 9 月～10 月	○各学部授業実践 ・単元記録表、評価表の活用	・各教科等を合わせた指導の授業づくり
令和元年 11 月～12 月	○今年度の研究のまとめ ・実践研究報告書作成 ○授業公開・実践研究報告会の準備 ・授業づくりの検討、資料作成	・研究の成果と課題 ・各教科等を合わせた指導の授業づくり
令和 2 年 1 月	○授業公開・実践研究報告会開催 ・授業公開 ・研究報告（実践、成果と課題） ・研究討論 ・講演「質の高い学びに向けた学習指導と評価について」 講師：関西学院大学 教授　眞城　知己　先生 ○県主催　令和元年度　実践研究報告会	・研究の成果と課題
令和 2 年 2 月～3 月	○次年度の研究計画の作成	・次年度の方向性 ・次年度の計画

（２）研究課題

【知的障害のある児童生徒の質の高い学びを実現するために必要な学習指導と評価の在り方】
　各教科等を合わせた指導について、各教科等の内容の明確化と精選、児童生徒につけたい力を意識した評価の観点の明確化を図り、効果的な指導方法について研究する。

（３）研究の概要

【単元記録表の活用】
　知的障害のある児童生徒の質の高い学びに向けて、各教科等を合わせた指導において関連する各教科等の内容の明確化と精選をするために単元記録表を活用し、学校教育目標へつながる単元目標の設定、関連する各教科等の内容の書き出し、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業づくりと評価を行ない、PDCAサイクルによる授業改善を図る。
【評価表(アセスメントシート)の活用】
　各教科等を合わせた指導において学部間の系統性を図りながら、一人一人の児童生徒につけたい力と

評価の観点を明確にし、関連する各教科等の内容、支援方法についてアセスメントシートをもとに教員間で話し合い、目標や手立ての改善を図り、評価の在り方を探る。
【主体的・対話的で深い学びの視点からの授業づくり】
　授業研究では、本校が考える主体的・対話的で深い学びの視点を明確にし、その視点からの授業づくりを考え、実践する。また、深い学びにつながる振り返りをするために振り返りの時間を授業時間内に設定し、一人一人に合った振り返りの在り方を考え、授業改善を図る。

（４）研究の成果

【単元記録表の活用】
　①　各教科等を合わせた指導の単元目標を3観点で設定し、関連する各教科等の内容の明確化・精選を行うことにより②一年間の各教科等を合わせた指導のPDCAサイクルによる授業づくりを行い、③単元記録表を用いて、学習活動から関連する各教科等の内容を書き出した。書き出しながら、学習活動の見直しと関連する各教科等の内容の精選を行い、授業改善を図ることができた。
【評価表(アセスメントシート)の活用】
　①　評価の在り方について②学部間の系統性をもたせたアセスメントシートを作成し、③アセスメントシートに観点別学習状況の評価の3観点から各教科等と合わせた指導においてつけたい力のチェック項目を設けて、個々の児童生徒の実態把握・目標設定・関連する各教科等・手立て・評価を記載した。このことで目標や手立てが具体的になり、教員間で話し合うことで教材・教具の工夫につながった。
【主体的・対話的で深い学びの視点からの授業づくり】
　①　主体的・対話的で深い学びの視点からの授業づくりについて②全体研修会を2回、授業研究会を2回設けて、共通理解を図った上で授業改善に取り組んだ。③本校で捉える主体的・対話的で深い学びの視点からの授業づくりと個々の児童生徒に合わせた振り返りの在り方について研究を行った。主体的・対話的で深い学びの視点からの授業づくりと評価により授業改善が図られ、個々の児童生徒に合わせた振り返りを行うことで深い学びにつながる児童生徒の姿を確認することができた。

（５）課題と今後の方策

　今年度活用したツール「単元記録表」「評価表（アセスメントシート)」は、記入量による教員の負担感や他の様式と重複する内容を考慮し、より使いやすいものとなるよう改善を図っていく必要がある。「単元記録表」では、関連する各教科等の内容の精選を行ったが、幅広い発達段階や実態差のある児童生徒に対し、どこまで書き出し、精選するのか、評価は個々になってしまうのではないか等の課題があった。今後は、各教科等の内容一つ一つの書き出しではなく、各教科の見方・考え方について理解を深め、各教科の見方・考え方から学習内容を捉え直していく。また、単元においてどの各教科等の内容がどのくらい関連しているのかが視覚的に分かりやすいように「各教科等内容表」を作成した。この「各教科等内容表」を単元、一年間、学年、発達段階、作業班、児童生徒一人一人等、今後目的に応じて活用すると授業改善やカリキュラム・マネジメント、個別の指導計画の改善等につなげることができる。「評価表（アセスメントシート)」では、単元における児童生徒の目標・手立て・評価を明確にできたが、一年後、二年後につなげるPDCAサイクルを実現するまでには至らなかった。今年度作成した「各教科等内容表」は関連する各教科等の内容のどこを扱ったかが視覚的に分かりやすい表になっている。この「各教科等内容表」を活用して、児童生徒の12年間の学びの系統性、何を学んだのかを明確にし、個別の指導計画との連携も図っていく。